

Management of pulmonary hypertension in congenital diaphragmatic hernia : NO with PGE1 vs NO

メタデータ	言語: English 出版者: 公開日: 2010-03-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 四柳, 聡子 メールアドレス: 所属:
URL	https://jair.repo.nii.ac.jp/records/2001006

順天堂大学 博士 (医学)
氏 名 四柳 聡子

論文題目 Management of pulmonary hypertension in congenital diaphragmatic hernia : NO with PGE1 vs NO
(先天性横隔膜ヘルニアにおける肺高血圧の管理
NO・PGE1 併用療法 vs NO 単独療法)

論文内容の要旨

先天性横隔膜ヘルニア(CDH)の治療成績は、遷延性肺高血圧症(PPHN)に対する治療効果により左右される。今日までPPHNに対し、一酸化窒素(NO)吸入療法、プロスタグランジンE1(PGE1)などの血管拡張剤投与が導入されているが、治療法は確立されていない。本論文では、CDHにおけるPPHNに対するNO・PGE1併用療法とNO単独療法について有効性を比較検討した。

対象は1997年から2007年までに当科で経験したCDH例49例。PPHNに対し、1997年から2001年はPGE1とNOを併用(PG+NO群; n=19)、2002年から2007年はNO単独での治療を行った(NO群; n=30)。この2群間で治療成績を比較した。

2群間で臨床像および患者背景に差を認めなかった。生存率は、PG+NO群は63.2%(12/19)、NO群は70%(21/30)で有意差はないもののNO群が高かった。PPHN改善の指標となる動脈管の閉鎖は、NO群で有意に早期であった(NO群:日齢 4.0 ± 0.9 、PG+NO群:日齢 9.5 ± 2.2)。NO群はPG+NO群に比し、有意に早期に手術を施行でき(NO群:日齢 3.75 ± 0.67 、NO+PG群:日齢 6.12 ± 0.78)、また在院日数も有意に短かった(NO群: 39.9 ± 19 、NO+PG群: 53.2 ± 23)。NO群で急激なPPHNの増悪をきたすものはなかった。

以上の結果より、NO単独での治療は、NO・PGE1併用療法に比し生存率が高く、手術時期及び在院日数の短縮が可能であることが示唆された。